

桃太郎説話の元となった「温羅」伝説

おかやま物語 http://www.pref.okayama.jp/doboku/doken/monogatari nomi chi/ura/ura_top.htm

総社市 鬼ノ城 <http://www.city.soja.okayama.jp/kanko/kankochi/kinojo.jsp>

吉備津神社 & 吉備津彦神社 <http://kibitujinja.com/> & <http://www.kibitsu hiko.or.jp/main10.htm>

などの home page より整理転記



岡山市西部と総社市東部にまたがる地帯では、昔から桃太郎伝説のルーツともいべき吉備津彦命の鬼退治にまつわる「温羅（うら）伝説」が語り伝えられている。

総社市鬼の城山にある古代山城・鬼ノ城と、奈良時代に出来た日本最古の歴史書『古事記』・『日本書紀』に見える吉備津彦命が、大和朝廷の命を受けて吉備平定に向かう記述が基になっている。

第11代垂仁天皇（4～5世紀、古墳時代）のころ、異国の鬼神が飛行して吉備国にやって来た。彼は百済の王子で温羅といい、足守川の西の方の新山に城を築き、その傍の②岩屋寺に楯を構えた。温羅の姿は恐ろしく、両目はらんらんして虎や狼のごとく、ぼうぼうたるひげは赤く燃えているようであった。さらに身長は一丈四尺もあり極めて狂暴であった。そして遠くを航行する船を襲っては財物や婦女子を略奪し、乗っていた人を釜ゆでにしていたという（③鬼の釜）。人々はこの山を①鬼ノ城と呼ぶようになった。

そこで朝廷は、その温羅を平定するために吉備津彦命を派遣することになり、吉備津彦命はまず吉備の中山に陣を構え（⑦吉備津神社 ⑧吉備津彦神社）、西には石の楯を築いた（⑤楯築遺跡）。一方 温羅は鬼ノ城に陣取る。



戦いが始まると矢合戦になったが、温羅は強く、双方の矢が空中で噛み合っ落ちてしまった（④矢喰宮）。そこで吉備津彦命は2本の矢を一緒に発射したところ、一矢は温羅の目にあって沢山の血が流れ血吸川（ちすいがわ）となり、浜は真っ赤に染まった（赤浜）。温羅は雉（きじ）となって逃げたが、吉備津彦命は鷹（たか）となって追った。今度は、温羅は鯉となって血吸川に逃げたので、吉備津彦命は鵜となって温羅をくわえ、ついに首をはねた（⑥鯉喰神社）その首は串に刺してさらされた（⑨白山神社）。

しかし首は何年も吠え続けたので、犬飼武命に命じて犬に食わしたが、まだ吠え続けたのである。このため吉備津彦命は吉備津神社の「御釜殿」の下に埋めたが、13年間も唸り続けたという。

ある夜吉備津彦命の夢に温羅が現れ、「わが妻・阿曾媛にお釜殿の火を炊かせば釜を喰らせてこの釜で世の吉凶を占おう」といった。命はそのお告げの通りにすると、唸り声も治まり平和が訪れた。

これが現在も続く吉備津神社に伝わる「鳴釜神事」の起源で、その後、吉備国の統治にあたった吉備津彦命は、晩年、吉備の中山の麓の茅葺宮に住居を構え、281歳の長寿をまっとうした。

【参考文献】 [あるく岡山桃太郎伝説の旅（岡山市・岡山市観光協会）](#)・[岡山三市を結ぶ歴史ロマン主人公ゆかりの地をたずねる旅](#)・[図説岡山県の歴史](#)・[吉備津彦命の鬼退治](#)・[博学紀行岡山県](#)



古代にはこの伝承の舞台となった吉備の中山周辺は海岸線に近く、小高い吉備の中山は神体山と仰がれる。温羅一族を滅ぼした後 吉備津彦は備中山の麓に茅葺宮を造って住み、吉備を治め、281歳で亡くなり、中山山頂部にに葬られたという。吉備の中山の山上にある御陵はこの吉備津彦命の墓と伝えられ、宮内庁が管理している。現在、この吉備の中山の北東山麓と北西山麓に同じ吉備津彦命を祭神とする吉備津彦神社と吉備津神社があるが、いずれの社伝にも吉備津彦の屋敷跡に社殿を造営して吉備津彦を祀ったのが始まりと伝える。

このように二つの神社が近接してあるのは、大化改新の後 吉備国がこの吉備の中山を境とする備前・備中と備後に3分割された時に、吉備津神社がそれぞれの国の守り神として分社され、それぞれが国の一宮として信仰を集めてきたためである。

また、吉備津神社の釜殿で今に続く「鳴釜神事」これは神官と阿曾女と二人で執り行う神事。

阿曾女というお婆さんは温羅が寵愛した女性と云われているが、鬼の城の麓に阿曾の郷があり代々この阿曾の郷の娘が奉仕しているという。

阿曾女が釜に水をはり湯を沸かし釜の上にはセイロがのせてあり、常にそのセイロからは湯気があがっている。

神事が始まると祈願した神札を竈の前に祀り、阿曾女は神官と竈を挟んで向かい合って座り、神官が祝詞を奏上する頃、セイロの中で器にいった玄米を振ると鬼の唸るような音が鳴り響き、祝詞奏上し終わるころには音が止むという。

この釜からでる音の大小長短により吉凶禍福を判断しますが、そのお答えについては奉仕した神官も阿曾女も何も言わず、自分の心でその音を感じて判断するという。また、この阿曾の郷は昔より鑄物の盛んな村で、お釜殿の大きな釜が壊れたり古くなって交換するのはこの阿曾の郷の鑄物師の役目であり特権でもあった。



この温羅の城「鬼ノ城」の東直下に広がる阿曾の郷の谷間は古代「真金吹く吉備の中山」と歌われた吉備の大製鉄地帯（奥坂製鉄遺跡群）で、今はゴルフ場の池の底になっているが、日本最古 6 世紀の製鉄炉が見つかった千引かなくろ谷製鉄遺跡などが眠っている。

この鬼ノ城・阿曾の郷を中心とした温羅伝説はこの地帯に渡来した製鉄集団の話と言われ、吉備の鉄の支配を目指した大和側の話とする説が一般的である。

一方、岡山では「この温羅一族が鉄器で武器と農工具を作り吉備を開拓して国を豊かにした」とする民間伝承が語り継がれている。「桃太郎が鬼を成敗した」とする大和が作り出した説話とともに民衆にとっては吉備の国に豊かさを作り出した温羅は「鬼」ではなく、親しみのある「吉備の開拓神」とする解釈が「もうひとつの桃太郎」として広く語られるようになってきた。

「真金吹く吉備の中山」と歌われ、古代の製鉄地帯吉備を象徴する吉備の中山。そして、鬼ノ城直下 血吸川が流れ下る谷あいには製鉄集団がいて、製鉄を行っていた阿曾の郷。豊かな吉備の地を攻めて、鉄と国を大和の支配化に組み入れたのが吉備津彦であり、そんな古代伝承の痕跡が色々残っている。



古代の正規の歴史書には登場せず、未知の部分が多い鬼ノ城は7世紀の巨大な朝鮮式の山城。

すり鉢を伏せたような形の山で、斜面は急峻だが頂部は平坦である。この山の八合目から九合目にかけて、城壁が2.8kmにわたって鉢巻状に巡っている。温羅の伝承は4・5世紀頃の伝承が元と考えられているので、直接的にはずれている。

城壁は、一段一列に並べ置いた列石の上に、土を少しづつ入れてつき固めた版築土塁で、平均幅約7m、推定高は約6mもある。

要所には堅固な高い石垣を築いており、その威圧感は天然要害

の地であることとあわせ、圧倒的な迫力をもっている。このように、版築土塁や高い石垣で築かれた城壁は、数m～数十mの直線を単位とし、地形に応じて城内外へ「折れ」ていることに特徴がある。



城壁で囲まれた城内は比較的平坦で約30ヘクタールという広大なもので、出入り口となる城門が4ヶ所にあり、4つの谷を含んで山の周囲を取り囲んでいるため、谷部には排水の必要から水門が6ヶ所に設けられている。城内には、食品貯蔵庫と考えられる礎石建物跡や狼煙場、溜井（水汲み場）もある。この他に城内には貯水池とみられる湿地が数ヶ所ある。

さらに兵舎、各種の作業場なども予測されるが未発見である。

昨年 12 月 すぐ下に 古代の製鉄地帯をすぐ下に見降ろす鬼ノ城東門の上の尾根筋から鍛冶炉を伴う鍛冶工房跡が発掘され、鬼ノ城内で大規模に武器を作って、備えていたことがわかってきた。

百濟再興のため、朝鮮に兵を送った日本が、663年の白村江の戦いで敗北。唐・新羅連合軍が本土に侵攻するのではないかと危機感を抱いて、西日本各地に築かせた古代山城の一つであるという説に信憑性を帯びてきたといえる。